

図1 将来人口推移 (徳野貞雄氏発表資料より抜粋)

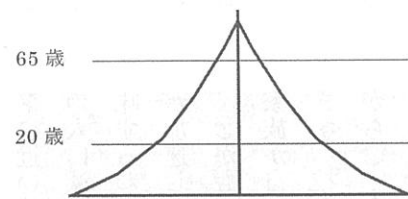


図2 人口ピラミッド (昭和30年代まで)
(徳野貞雄氏発表資料より抜粋)

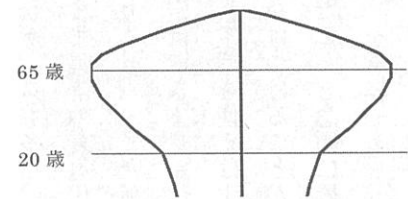


図3 人口ピラミッド (現代)
(徳野貞雄氏発表資料より抜粋)

◆生産年齢人口と高齢者の捉え方
図1は、現在までの日本の人口推移と将来の人口推計です。総務省が統計としている年代区分は、〇〜一四歳、一五〜六四歳(生産年齢人口)、六五歳以上となっています。生産年齢人口とは、国内の

たします。

生産活動に就く労働力の対象となる年齢人口です。ところが、現在、一五〜一八歳の人口のほとんどは高校に通っており、さらに高校生の八割以上が大学や専門学校に進学しています。つまり、現在の一五〜二二歳を生産年齢人口に当てはめて考えるのは現状にあわないと先生は指摘されるのです。
このことは、「高齢者」と呼ばれる年代にも当てはまります。図2に示されている昭和三〇年代までの人口ピラミッドを見ると六五歳以上の割合は少なくなっています。図3の現代の人口ピラミッドでは六五歳以上が他の年代よりも突出

して多くなっています。ところが、現在の年金や福祉の考え方は図2をモデルに計画されたものなので、これは現状にはあわないといえます。加えて、昭和三〇年代の六〇歳以上と比べて、現代の六〇歳以上は元気でまだまだ余力のある人が多いのです。先生はこのことを強調して、六〇歳から七五歳までの人たちを地域やお寺で活躍してもらおう可能性のある「ブレイク世代」として捉えておられます。
新聞記事やテレビの報道でもこうしたデータは取り上げられますが、実際の生活の現場から、データを捉え直す視点を紹介されました。

◆「人の動き」をつかむ——集落点検——

先生は全国の集落に出かけて行き、実際の生活を調査されています。特に力を入れておられるのは集落点検です。集落点検では集落に入りする「人の動き」を調査します。地域を「人の動き」から捉え直す新しい試みです。たとえば行政による人口調査は、人を個体として識別

浄土真宗本願寺派 総合研究所 公開講座

農村ラのお寺

～その役割と可能性～

開催日 2014 (平成26) 年11月7日

はじめに

◆公開講座の開催趣旨

浄土真宗本願寺派総合研究所では、「自我共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」活動として、現代社会の当面する課題に対して、先端的知見を有する有識者から多角的な提言をいただき、宗教的立場から、より良い社会の創造のためいかなる役割を果たしうるかを、多くの人々と共に考えるための公開講座を開催しています。

◆今回の公開講座の目的

宗派の大きな課題の一つとして過疎問題が挙げられます。宗門が二〇〇九年に実施した第九回宗勢基本調査報告によって、宗門寺院の約五五%が農村、山村、漁村に所在するということがわかりました。農山漁村において問題とされるのは、資本や経済もさることながら、離村による高齢世帯の孤立化です。一方で、孤立

化という課題は、かたちを変え都市においても存在しており、この課題は社会全体をとりまく課題ともいえます。

そこで今回は、浄土真宗のお寺にどのような活動が担えるのか、「ムラのお寺」の役割と可能性について考えを深めることを目的に公開講座を企画しました。

◆講師紹介

今回のご講師である徳野貞雄先生は、熊本大学教授として教鞭をとられる一方で、「道の駅」の命名者として地域社会の活性化にご尽力されています。さらに、「集落点検」という、独自の調査から集落の実態に迫り、具体的な活動を展開されています。

講演概要

当日は、一般来場者と各教区寺院振興対策委員・各教区教務所職員を含め約二〇〇名の方が受講されました。ここでは、徳野貞雄先生の当日の講演内容を報告い



公開講座の様子

するため、いわば「止まった状態」を原則として計測をおこないます。住民票などから家に居住している人の数を把握し、地域の状態が計測されることになり、結果、集落から人が一人出て行けば、その地域は「人口減」とみなされることとなります。

ところが集落点検をしてみると、「人の動き」が見えてきます。集落から出て行った家族が、親のことを気にかけて集落に近づいてくる様子が見られます。これは一例に過ぎませんが、先生がおこなわれている集落点検では、現状の認識をすすめ、孤立化に対するアプローチをおこなっておられます。

小結—所感—

徳野先生は地域や家族を、「すでに在る」ものと位置づけます。「すでに在る」とは、自分が生まれた地域環境や家族構成が自分の意思や判断とは別に、存在していることを意味します。「すでに在る」状況では、たとえば家族がそうであるように、起こる困難や喜びを共有する必然性に追われます。先生のご指摘は、そうした被動態としての現状を再確認しようというものです。そうすることで現状に対する誤解や問題点が見えてきます。

今日の社会が目指しているのは、資本に重点を置いた消費社会です。消費社会ではあらゆるものが資本として識別さ

落に近い地域に住むケースも多く、集落の人口減少がそのまま集落の衰退化を意味するわけではありません。また孤立化が加速したとも断定はできません。

しかも今は、携帯電話を使えばすぐに家族が自家用車で駆けつけることができます。技術が進んだことも念頭に置きながら、「人の動き」を掌握することは、必要な作業であると先生は考えているのです。

ただし、個人情報の問題などから、行政が踏み込んで点検をおこなうことができません。そこで、お寺で集落点検をおこなってみてはどうかと先生は提案されました。お寺には既存のネットワークも存在しますし、点検をすすめることで、集落の持つ潜在的な力を再確認することができるとのことです。

家族と世帯のとらえ方

先生は実際に過疎化がすすむ京都府のある村を調査されました。この地域は若い世代が少なく、老夫婦が多いことから、

れ、人もその対象となります。このような価値観の中で、過疎化の現象や人口減少問題を考えると、その対応は、労働力や金銭を投資することに偏りがちになってしまふでしょう。過疎といわれるお金のない社会において、そうした対応は現実的とはいえず、そのことで置き去りにされていると悲観的に考えてしまいがちです。しかし、このような消費社会において見落とされがちなのは、さまざまな



公開講座の様子

高齢者の孤立化の心配が絶えず、住民も将来に悲観的です。しかし、集落に住まう老夫婦から子どもたちの居住地を聞き取りしたところ、多くが京都・大阪・神戸など車で一時間圏内に住んでいることが確認されました。加えて、三日に一度家を訪ねる子どもがいたり、週末には野菜を取りに来る子どもや孫がいたりすることがわかりました。この村の実に三分の二の世帯において、村外に住む家族が出入りしていることが確認されたのです。

「村から若者が出て行った」「家族がバラバラになった」といわれることがありますが、調査から見えてきたのは、家族が同じ空間に居住しなくなったものの、「家族はバラバラになった」のではなく、家族の機能はかたちを変えて、以前と変わらず続いているということでした。ただ、そのことを住民が認識できていないという問題が浮き上がりました。また、「家族がバラバラになった」という表現が多用された結果、集落に悲観的な雰囲気

つながりの視点ではないでしょうか。

浄土真宗のお寺の活動は、地域や家族といった「すでに在る」状況を基礎として相続されてきました。こうした地域や家族の中で、人々は雑談をしたり、情報交換をしたり、あるいは共に体を動かすことで人と人のつながりを感じたりするなど、人や自分自身についてより深く思いを巡らせてきました。現に、浄土真宗の多くのお寺では人と人のつながりを深める活動が展開されています。徳野先生がお示し下さった集落点検は、活動の原動力になる地域や家族とのつながりを再確認する一つの方法として考えることができるでしょう。

この再確認の作業によって、それぞれのムラにおけるお寺の役割や可能性が見えてくるのではないかと考えます。皆様のお寺にあるつながりを改めて確認し、そこから具体的な活動の方向性をさぐってみてはいかがでしょうか。

(那須公昭 本多真 横井桃子)